

(令和3年度山川寿子研究奨励賞受賞者研究発表) 1.
リソソーム関連分子Folliculin
による造血幹細胞制御機構の解明

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, 牧子, 石津, 綾子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/00033385

12. 学童期からの夜間異常行動に長時間脳波を施行した1例

(本院¹ 卒後臨床研修センター,² 小児科) ○吉田華葉¹・◎中務秀嗣²・
大宮亜希子²・道下麻未²・岸 崇之²・竹下暁子²・伊藤 進²・永田 智²

13. 乳房パジェット病を契機に発見された乳癌に対して迅速に治療介入が行われた1例

(足立医療センター¹ 卒後臨床研修センター,² 皮膚科,³ 乳腺診療部,⁴ 病理診断科) ○金納慶蔵¹・
宮本樹里亜²・梅垣知子²・◎石崎純子²・田中 勝²・平野 明³・黒田 一⁴

14. 骨折後に脂肪塞栓症を発症した1例

(足立医療センター¹ 卒後臨床研修センター,² 救急医療科) ○町田実斉¹・◎庄古知久²

15. 新型コロナウイルス感染症流行期の重症肺炎診療においてニューモシスチス肺炎を疑い

後天性免疫不全症候群発症の診断に至った1例

(足立医療センター¹ 卒後臨床研修センター,² 救急医療科) ○百瀬秀夫¹・◎中本礼良²・庄古知久²

総 評

(八千代医療センター卒後臨床研修センター長) 高梨潤一

ベストプレゼンテーション賞発表

(本院卒後臨床研修センター長) 西村勝治

閉会の辞

司会(幹事) 小森万希子

〔令和3年度山川寿子研究奨励賞受賞者研究発表〕

〔令和3年度佐竹高子研究奨励賞受賞者研究発表〕

1. リソソーム関連分子 Folliculin による造血幹細胞制御機構の解明

(解剖学(顕微解剖学・形態形成学分野))

望月牧子・石津綾子

がん抑制因子の一つである Folliculin (FLCN) 遺伝子は細胞内リソソーム膜に存在し、リソソーム活性の制御を始め、細胞内小器官の動態を調整し、細胞内代謝制御を行っている。造血幹細胞(HSC)は自己複製と多分化能を持ち合わせた血液の幹細胞であり、発生期は増殖するものの成人期には細胞分裂が静止期に留まり、その代謝は生涯においてダイナミックに変化する。したがってHSCにおける代謝制御機構を理解することは造血幹細胞とその疾患メカニズムを理解するために重要である。我々は造血特異的に FLCN を欠損したマウス (Flcn^{fl/fl}; Vav1-Cre) を用いて造血発生における FLCN の機能を検討した。胎生 13.5 日の Flcn^{fl/fl}; Vav1-Cre マウス胎児肝において HSC 数およびそのミトコンドリア膜電位に変化はみられなかった。これまでの知見から Flcn^{fl/fl}; Vav1-Cre マウスは 5 週程度で致死であることが明らかになっていることから、今後は生後 2, 3 週程度の Flcn^{fl/fl}; Vav1-Cre マウスにおける HSC の表現系について検討を行いたい。また、タモキシフェン投与によって誘導的に造血特異的に FLCN を欠損できる Flcn^{fl/fl}; eR1-Cre-ERT2 マウスの作製を行い、成体 HSC における FLCN の機能についても検討を行っていきたい。

1. 二次性進行型多発性硬化症の早期診断における歩行機能検査の有用性について

(脳神経内科学)

池口亮太郎

脳神経内科では、多岐にわたる疾患の診療を行っている。我々はその中でも、多発性硬化症(multiple sclerosis: MS)、視神経脊髄炎、重症筋無力症などの神経免疫疾患の診療・研究に注力してきた。これまでに「中枢神経脱髄性疾患の病態における接着因子の研究」や「視神経脊髄炎の病態における傍腫瘍性機序の研究」、「中枢神経脱髄性疾患と脳腫瘍の鑑別に有用な各種検査に関する研究」などの研究を行い、学術誌にも報告してきた。MSは代表的な中枢神経脱髄性疾患であり、多くは改善と寛解を繰り返す再発寛解型である。再発寛解型 MS の約半数が、再発の有無に関わらず進行性の経過を示す二次性進行型 MS (secondary progressive MS: SPMS) に移行する。2020 年より SPMS で進行抑制効果を示す治療薬が認可されたが、SPMS の病態や治療効果発現機序は明らかでないのが現状である。また SPMS には診断マーカーがないことが問題となっている。今回、我々は SPMS の早期診断マーカーとして歩行機能に着目した。少数の先行研究において、歩行機能低下が SPMS の診断マーカーとなりうることを示されている。我々は、経時的に歩行機能を解析することで SPMS への移行をより早期に診断できるという仮説を立てた。歩行機能解析は、短時間かつ簡易に歩行機能を解析できる高感度センサーを用いて定期的に行う。本研究は、SPMS の早期診断における歩行機能解析の有用性について重要な提案ができると確信している。